

地域社会参加の学び －「学而事人」を实践する教育活動－

清水 貴恵

1. はじめに

異なる文化や文化の多様性というものは、国家や民族、また言語などによる区別でくられた大きな集団の間だけに存在するものではない。身近な地域社会にある様々な小さな集団（例えば、年齢や世代、ジェンダー、職業や社会的な立場・役割、障がいの有無など）にもそれぞれ固有の文化がある。つまり、学生が大学という自文化から飛び出し、地域社会への参加は異文化接触である。また、その現場でのコミュニケーションは異文化コミュニケーションである。

このように異文化や文化の多様性をとらえると、「地域社会参加」は生きた異文化間教育の实践といえよう。そして、本学の建学の精神である「キリスト教精神に基づいた教養豊かな国際的人材の育成」を具現化する教育活動である。

また、我々に求められていることは、在学時より「自分だからできること」を自ら考えてできる人材の育成、つまり「学而事人」（学びて人に仕える）の教育である。学生は本科目を通じて地域社会へ参加することで、社会を構成する一員としての認識を深める。そして、現場の人々とのインタラクションのなかで、学生は自分なりの貢献を重ね、さらに多くの気づきを得る。このような一連の学習活動を提供する本科目は、学而事人の教育活動の实践といえる。

2. 地域社会参加とは

(1) 科目の概要

本科目は、フィールド教育部門の「フィールドスタディーズ」科目として2007年度に開講した。2012年度現在、12のプログラムを展開しており、テーマ、活動の内容や現場は多岐にわたる。各プログラムの概要と現場は表1のとおりである。

表 1 「地域社会参加」プログラム一覧

プログラム名	フィールドワーク（概要と現場）	
国際理解訪問授業	留学生による国際理解教育の支援	町田・相模原の小中高校、地域での実践
異文化理解教育リーダー研修 a	実物資料を活用した国際理解教育の支援	草の根国際理解教育支援プロジェクト、町田・相模原地域での実践
地域学校パートナーシップ a / b	a : 児童の学習および生活支援 b : 児童英語教育支援	a : 町田市の協力校 4 校 b : 稲城市の協力校 1 校
多文化共生支援 a / b	a : 外国籍住民（成人）の日本語学習支援 b : 外国につながる子どもの教科学習支援等	a : 相模原で活動する日本語教室 b : 町田で活動する学習支援教室等
不登校生学習支援	不登校児童生徒の学習支援、ふれあい活動	e ラーニング、本学
バイリンガル地域研究	日本人学生と留学生の協働学習	町田・相模原地域での調査
わたしたちに身近な貧困	路上生活者の支援	山谷・浅草地域の活動団体
災害支援とボランティア	被災地での復興支援	宮城県仙台市周辺
地域に根ざした福祉	様々なニーズのある人が自分らしく暮らせるまちづくりの活動への参加	福祉クラブ生協等
地球にやさしい食と農	生産者と消費者をつなぐ活動への参加	町田・相模原の JA や生協等

(2) 履修対象者

本科目は基盤教育院の開講科目であるが、履修対象者は初年次の学生だけではない。学年や学群、さらには国籍や母語などを問わず、本学のすべての学生にひらかれた学びである。つまり、本科目は様々な学生の協働学習でもある。2007 年度の開講時より、のべ 1,000 名ほどの学生が履修してきた（あいのり科目により履修した学部生や交換留学生も含む）。

表 2 2012 年度「地域社会参加」履修者数

プログラム名	LA	BM	健福	総文	他	計
国際理解訪問授業（留学生対象）	2				RJ16	18
異文化理解教育リーダー研修 a（b 休講）	10					10
地域学校パートナーシップ a（b 閉講）	19	3		2		24
多文化共生支援 a / b	30	7	1			38
不登校生学習支援	16	1		1		18
バイリンガル地域研究	16	1		1	RJ7	25
わたしたちに身近な貧困	20	2	1			23
災害支援とボランティア	24	9	1	2		36
地域に根ざした福祉（春学期のみ開講）	9					9
地球にやさしい食と農（秋学期のみ開講）	17	2	1			20
	163	25	4	6	23	221

(3) 科目の特徴

本科目に共通した特徴は、以下の 2 点である。まず、学生それぞれの「人間力」を活かして取り組むことである。現実の社会では、学力や知識だけでは対応できないことが生じる。その際、求められる力のひとつに人間力がある。本科目は、学生がそれぞれの人間力を活かし、さらに伸ばすような学びの機会となっている。そのため、教員には学年によって学生をひとくくりにしてとらえるのではなく、「一人の人間」として理解することが求められる。

もう 1 点は、本学での「学びの入口」、あるいは「学びの通過点」であるということだ。本科目を 1, 2 年次に履修することで、学生は自身の関心事を知り、学びの計画や専攻を考えるきっかけとなる。また、学群の授業や専攻での学びを本科目で結びつけたり実践したりできる。本科目は、様々な初年次教育、あるいは学群での学びを通して身につけたあらゆる力を総動員して取り組む学びであるので、学生の学びの成果や成長、また課題などをみることができる。

(4) 特徴的な学びのかたち

① 授業とフィールドワークの連動

本科目では、通常の科目と同様に、各学期の授業期間中に週 1 コマ（計 15 コマ）授業を実施し、あわせてフィールドワーク（プログラムによるが 20～40 時間）を実施している。

まず、授業の大きな目的はフィールドワークのふりかえりである。学生は活動をふりか

えり、それぞれの体験や気づきを共有し、学びとして深める。教員は講義形式の授業にとどまらず、ワークショップやミーティングなど、学生主体の参加型で協働的な学びづくりをしている。また、外部講師やゲストを招いたり、学外で授業を実施したりして、授業内においても学生が異文化の他者の声を聴いたり、関わったり、体験的に活動したりするような学びを提供している。このように、本科目において教員は知識や情報を与えるだけでなく、学生個々の学びや学生間の学びをより活性化させるファシリテーターとして働きかけている。



ワークショップ形式の授業

小学校での学習支援

中学生との国際理解の学習

フィールドワークの実施時期はプログラムにより異なる。例えば、毎週活動するものもあれば、長期休暇に集中して活動するものもある。現場での学生の立場は、ほとんどのプログラムにおいて、その集団の一員である。これは大きな特長である。学生は、その集団の一員として共に行う活動を重ねていくことで、自らをその集団の構成員として認識していく。これは、まさにレイヴとウェンガーの「正統的周辺参加」ではないだろうか。学生はその現場や集団の課題に対し、自分には何ができるか、自分だからこそできることは何か、主体的に考え、試行錯誤しながら他者との協働に取り組んでいく。このような学生の変容は、本科目のフィールドワークの位置づけや授業と連動した学びによるものである。

② サービス・ラーニング

本科目は「サービス・ラーニング」の手法による教育活動である。「地域社会と共に行う意味のある貢献」により、従来の学習活動が「より強化された学習」となり、学生が「よりよい市民となるような学び」である。したがって、社会的な活動そのものではなく、活動から気づきを得て学ぶことを目的としている。すなわち、ボランティア活動に対する単位認定ではない。また、教育実習やインターンシップとも異なるため、現場での活動の質や技術的な成長を評価するものではない。本科目では、本学のサービス・ラーニング科目として、2012年度は以下を共通の教育目標として実践した（一部のプログラムを除く）。

1. 授業外学習で行うボランティア等の活動を通じて、地域とそこに住む人々と関わり、地域の問題解決に何らかの貢献をする。
2. 地域での活動を通じて、地球市民としての意識、感受性、人間力、行動力を養う。

3. まとめ

本科目の成果と課題をとりあげ、まとめとする。2011年度秋学期の開講プログラムで実施した授業評価アンケートの結果を分析したところ、すべての質問項目において、最も良い評価の回答率が全学の結果（平均値）より上回った。このことから、本科目のような体験的で他者との協働により展開される学びは、本学学生の知的欲求を満たすものであると考えられる。本学サービス・ラーニング科目として、より質の高い学びへと発展させていくことを、今後も引き続き取り組んでいきたい。

そのため、今後の最も重要な課題は評価である。本科目では、授業やフィールドワークへの協力的な参加、授業における学習記録（ワークシート、リアクションペーパー）、フィールドワークの記録（フィールドノートや日誌）、学期末の課題（レポートやエッセー）などを評価材料としている。これらをもとに、到達目標に対する学生の達成度を総合的に評価する。学力や知識だけでなく様々な力を活用して取り組む学習活動において、客観的な評価の提示は容易なものではない。しかしながら、学生自身が学習の成果や成長を理解することは、学びの過程において不可欠である。また、学生の学びを保障するという観点から、教員の義務でもある。

4. おわりに

「地域社会参加」は授業とフィールドワークの連動した学びにより、大学内で完結した授業では成し得ない学びを、学生に提供している。今後は分野や教育組織を超えた連携により、こうした学びを拡大し、学生の学びをよりいっそう支援していけないのではないかと考える。

最後に、日頃より学内外で本学学生の学びと育ちを支えてくださっている多くの方々へ感謝の意を表したい。本科目は、各プログラムの担当教員やフィールド教育部門の教職員の力だけでは決して実現することができない貴重な学びである。また、我々教員にとっても、多くの協力者との対話と協働により「地域社会参加」という有意義な異文化間教育の実践の場が与えられているものとする。このことへ感謝するとともに、地域に根ざした「学而事人」の教育活動として、今後もさらに発展させていきたい。